佛教と其歴史に關する便利なる一般の讀物たるを失はざるなり。

（丙午出版社發行、價、一、〇〇）〔西田〕

◎日本歴史圖錄　第四、五、六、七輯

其後發行せられたる本圖錄第四輯には、英國公使館浪士亂入圖の原色版を初めとして、上古の甲冑、聖德太子御像、百萬塔陀羅尼、賀茂神社、僧兵等あり、第五輯には鎌倉時代の旅行風俗を石山緣起より採りて彩色版とせる外、寫眞版には、齋瓮土器の諸種の標本的なるもの、法隆寺圖、奈良朝武器等のあり。其他彫刻にても、東大寺大南門の二王尊、運慶湛慶木像等あり。近世に關しては後水尾、後光明兩帝の尊影を初め、光琳、宣長等の作品著述等あり、第六輯には、慶長頃風俗の彩色木版以下橿原神宮、伊勢神宮、古墳圖、楠木正成、足利尊氏、山田長政に關するもの等、第七輯には、蒙古襲來圖、鑑眞、菅原道眞、探幽、幕府遣歐修好使に關するもの、其他上古裝飾品、腹當、釣燈籠の如きあり。本圖錄が發刊以來每輯、常に國史の各時代と各方面に亘りて汎く其材料を採擇し來れるは、啻に學校に於ける國史教授の參考書なるのみならず、一般歴史趣味の涵養に資するところ大にして、編者の努力は多とすべきものあり。（歴史參考圖刊行會發行、會員頒布）

◎通歴七卷　唐　馬總撰

◎續通歴五卷　宋　孫光憲撰

この兩書は其名世に著聞すれども傳本少くして史家の常に憾みとせしものを、近年葉氏夢篆樓にて排印せるものにして、通歴はもと十卷あり、天皇氏より隋季に至る迄の本紀を略纂し、粗〻其君の行迹賢否を述べ、且つ歴世南の史論を各篇末に分系して其義を見はせるものなるが久しく其初三卷を缺きて西晉以後の七卷を存し本書亦然り。記事多く正史より抄撮せるものにて通鑑の先驅をなせども、其淹貫博贍固より彼に比すべくもあらず。但し梁武帝傳は史鈔の今に存する者此書を最古とし、虞氏の略論も大抵散佚せしに此に賴りて尙梗概を知るを得べし。此書遠の頃迄盛行せしが後多く傳はらずして四庫全書にも之を收めざりき。續通歴は唐高祖に起り周王審知に至る。初め十卷ありしか。記事頗る實を失せしを以て宋太宗詔して之を毀たしめたりといふ。今存する所五卷にして何れの部を削除せしが不明なれども猶唐及五代の大勢を錄す。その五代の部は主として薛書に依れるが、乾隆中永樂大典より薛史を抄輯せし時數篇全く亡びたるを本書にて補足せりといふ。

## 唐方鎮年表考證二卷　今人吳廷燮撰

天寶以後は方鎮始めて盛に、遂に唐室傾覆五代革命の要因をなしたが、その沿革に關し歐書は地を表すれども人に及ぼず、劉紀は人に詳かなれども事表なし。殊に會昌以後は記述斷絶して敏求實錄大典皆よく收めず。依て本書の著者清史館編修吳氏は文苑英華、翰院題名、會稽郡志等は固より詔令、諸集、雜史、稗官、吉金、樂石等を博搜し、大抵開成以前は兩唐書通鑑を主とし、會昌以後は歐史、全唐詩文を骨子として本書を編成せり。この內容は乾符六年の方鎮表を以て定となし、總て四十七鎮に分ち、關內道より始め、鳳翔、邠寧、鄜坊、涇原等の各鎮につき夫々節度使觀察使の人名を年代順に列擧し、之に其事蹟を附記して一々原據を明にせり。然れども除拜ありて罷免なきあり。一鎮或は數年、十數年人なき者あるは史の闕げたるなり。若夫れ節度使の加官、留後、遙領に至ては隨事附載し具錄せず。尙首に各鎮の名目官職等を掲げたる叙錄を出し、尾に方鎮の功過並に用人の變遷を說けるり。

## 北宋經撫年表二卷　吳廷燮撰

宋太宗即位して盡く方鎮を廢し節察に任ずるもの惟一郡を領するに過ぎざりしが、咸平以來盜寇頻りに起りて事ある每に安撫を置き、亂れば則ち之を省けり。實元以後夏遼の難益烈しきに至り、河東陝西に初めて經撫を任じ、慶曆の季又河北を增し、皇祐に廣南湖南にも之を置き、皆一帥を以て隣兵を控制し領郡多き者或は二十を逾ゆ唐の方鎮も及ばざるものありて近年の帶撫に似たり。本書は京東東路、京東西路等の二十七路府に分ち、慶曆元年より靖康二年まで八十七年間を一年每に劃して人名と事蹟を記入せるものなり。而して元符以上は長編を、徽欽兩朝は諸文集を主とし、之に宋史、墓誌、臨安續康會稽三志、繫年要錄、北盟會編、金石萃編等を博收し皆其原據を明記せり。

## 明史考證攟逸四十二卷　清　王頌蔚編

明史三百三十六卷は乾隆四年に成りしが同四十年四十二年の頃元人の氏名譯字を改め、土木の變の本紀の文を訂正せること續東華錄に見ゆ。然れども志表傳の修改と否とは史に明文なく、關人の撰者にも亦明史に關するもの少し。光緒庚辰の進士王頌蔚が後に官を以て軍機處に出入せしに同廠值房に明史考證稾藍面册明史卷一一六―三三二（缺卷一九五）凡二百十六卷あり。列傳首尾略〻具はり案語は黃籤を以て謄書せるを見、又藁本四十餘册と正本二巨册卷一一八―三二八（缺卷二五二―二五六）凡二百六卷とを得たるが、每卷明史卷幾考證と題し、意明史各卷の後に分附せんとするに在りて、每條臣某〻案と稱し、他史の考證と式を同ふせり。

依て王氏は互證參觀精審編定して四十二卷となしたるに一昨丙辰年冬月初めて劉氏嘉業堂より刊行せるもの即ち本書なり。而して本書の卷頭には此來歷を詳叙し、次に改譯人地名を錄し、各卷纂輯姓名を擧げ、後に攷證の本文に入れり。此本文は列傳第一の后妃傳より始めて順次外國傳に至り、列傳第二百二十西域四を以て終れり。每傳明史の章句を掲げ、實錄其他多くの史籍より關係事項を摘出して補正に資せり。されば明史本傳と併讀すれば得る所少からざれども大抵通行の史料より採錄せるものにして、且つ記事短簡なるを以て、餘りに多くを期待すべからざるは遺憾なり。例へば朝鮮傳には朝鮮記、明實錄、大事記、一統志、方輿紀要、識大錄、明史紀事本末、高麗志等を、日本傳にも吾學編、續通考、周咨錄、獻徵錄、識大錄、一統志等を參照せるに過ぎざるを以て其成果の程も推察せらるるなり。〔以上有高〕

● *C. W. Previté Orton:* Outlines of Medieval History. (Cambridge: at the University press, 1916)

中世史の一般狀勢變遷の概要を知得せんとする者の爲には恰好の良書たるを失はず。殊に中世期の概觀を述べたる卷頭の序文は、簡なれども能く時代の眞相を握めるものとして、推賞すべき値あらんと信ずるなり。本書は紀元三九五年皇帝 Theodosius 一世の殂落によりて羅馬帝國が全く東西に分離したる時を以て中世史記述の筆を起し、一四九二年のコロンブス新大陸發見に終れり。全編五百餘頁章を分つ十一各章を更に數節に分ちて主要なる事象を說述せり。中世一般史として固より完全なるものとは稱し難く、間々重要なる事項や方面の閑却されたりと思惟せらるゝ點鮮きにあらざれども、記述平明簡潔にして頗る要を得たるものといふべし。篇中數葉の地圖を附す、中に就いて第四圖西方敎會の大勢の如き、第六圖十四世紀の通商路圖の如き何れも簡明にして而も初學者に有益なるものなり。只本書に簡單なるビブリオグラフイの附しあらざるは、一般向の著述たりとするも聊か憾みとする所なり。

● *James Harvey Robinson:* the Middle Period of European History.(From the Break-up oi the Roman Empire to the Opening of the Eighteenth Century) Ginn and Company, Boston.

先に Breasted 敎授及 Beard 敎授と共に Outlines of European History. 二卷の好著を公にせる著者が、同書に於て自己の擔當したる羅馬帝國の倒壞より十八世紀初頭迄に至る時期を自己の意見により歐洲史中期と名附け、該時期に於ける一般史的變遷を說述しこれを別冊として出版せるもの即ち本書なり。著者が在來の中世史近世史の時期區分を用ひずして所謂中世期と十六七世紀とを